

国際健康開発 IHD

特定非営利活動法人(NPO)会報 6号 2011年5月

平成 22 年度の事業報告と今年度計画について

牛島廣治

日本大学医学部病態病理学系微生物学分野

3.11 の地震・津波・原発事故は、第二次大戦に次ぐ大きな出来事で、これからの多難なる中での復興が念じられます。残念ながら原発の事故は我々の世代を超えて、長い間子孫に負担をかけることとなります。海外からの留学生は、より大きなパニックに陥り大変であったようです。果たして、我々の英知と努力で、復興がスムーズに行くのでしょうか。エネルギーの代替、消費電力の削減はうまく行くのでしょうか。

当 NPO の理事会・総会は平成 22 年 4 月 14 日に、池袋の生活産業プラザで行われました。大分大学大学院医学研究科博士課程の外国人学生が江下理事に伴われてオブザーバーとして参加しました。報告事項として平成 22 年度の会計収支報告と事業報告をしました。審議事項として(1)海外活動事業を行うために必要な国内活動、または国内に在住する留学生への支援事業などが現在の定款の項目にないために定款を変更することが承認されました。即ち、「海外活動支援事業」を「海外・国内活動支援事業」とすることになりました。(2)平成 23 年度の事業計画として、昨年度予定の Pattara さんの来日が東日本大震災のため延期され、今年度(4月15日)になりました。

た。アジアからの研究者の受け入れ、アジアへの検体採取のための派遣支援が予定されています。

当 NPO の活動を、より非特定多数に広げて行くのか、行けるのなかなか定まらないうです。確かに、身近な若いアジアの研究者の支援は行っております。一定の成果は出ていると思います。今回の大震災に対して、我々が開発してきたノロウイルスの診断キットの無料配布を考え、震災地の医師あるいは公的機関に連絡を取ったのですが特に要望はありませんでした。実際、ノロウイルスの流行も見られていないようです。資金にも限度があるため、当面は身近な援助が中心になろうかと思います。

1 月末に NPO の多く者が研究活動を行う場所を渋谷の藍野大学藍野健康科学センターから板橋の日本大学医学部微生物教室(早川智教授)に移動しました。Chan-it さん、Kim さんの博士課程卒業で大学院生は現在 Tran さん、Aksara さんだけになってしまいました。研究の量と質の低下が危ぶまれます。幸いなことに卒業した研究者との交流があり、彼らが困った時は手伝ってくれるものと期待しています。

My experience after one year living in Japan

TRAN Dinh Nguyen

Dept. Developmental Medical Sciences

Graduate School of Medicine, The Univ.
of Tokyo (Master course student)

Life is a journey. So let's enjoy it.

I have never thought I would go to Japan until one day, Ushijima-sensei gave me a chance to study at Tokyo. Undoubtedly, Japan is one of the fascinating countries that always attracts a lot of people. I impress Japan as the beautiful natured place, attractive culture, on the contrary it is developed and permeated with high technology either. Tokyo is a city that could be described as a futuristic place in the present. It is clean, orderly and crime is almost non-existent. The technology is sure very advanced. It has been a wonderful time and has been one of those once in a lifetime events. So I've got to thank some people for it.

I have been in Japan for almost one year now. To be honest it feels like a lifetime has already passed. I arrived here on the late of March. Tokyo welcomed me on the beautiful day with yellow sunlight and the cold of 2°C of spring. Normally, when you go to live abroad for the first time you get some sort of cultural shock. For some it feels good, for others it is uncomfortable. My first experience was a kind of horrible. Without Internet, without telephone, and language barrier, I had to gnaw the

feeling of loneliness and homesick many early nights. The novelty of a new place can sometimes suppress your feeling. Everything is new, everything is different. However, in Japan, the people are very kind and helpful. I found that everywhere I went, my needs were met, whether it was the bank, the post-office, the mobile phone agency, or the supermarket. The following days were very busy. All foreign students like me had to apply for a "Certificate of Alien Registration", had to get the national health Insurance card, register in the university, get a bank account, etc. After that of course I had to face the bureaucracy of actually enrolling into the university, Japanese class, and laboratory work.

Of course, the most important part of my life here is as a student at the University of Tokyo, one of the most prestigious universities in the world. I really like the university and Hongo campus. It feels very nice and very proud. Everything usually has trouble at beginning. At first, my lab work failed many times. Thanks to the instruction, the help and encourage from Ushijima-sensei and labmates, I could gradually see the light at the end of the tunnel. I was engaged in studying about rubella virus in Vietnam. Rubella is a mild disease that mainly affects young people. It is characterized by a mild fever along with non-confluent

maculopapular rash and lymphadenopathy. However, rubella virus infection during the first trimester of pregnancy can lead to abortions, miscarriages, stillbirths, and severe birth defects, known as congenital rubella syndrome (CRS). Up to now, there is no effective treatment for CRS except supportive care. Lifetime treatment for patients disabled by CRS is very costly. In contrast, a vaccination program to interrupt rubella transmission and to prevent the occurrence of CRS costs about 7% of the total cost of care and rehabilitation of CRS cases. The benefits of vaccination far outweigh the costs associated with the treatment of children with CRS. Unlike most developed world, rubella vaccine is not included in national vaccine program of developing countries. Therefore, CRS cases continue to occur and rubella is still recognized as an important global disease in a general public health context. The World Health Organization suggest to eliminate rubella worldwide. Study about genetic characterization of rubella virus will contribute to the disease control effort. My research results showed that rubella viruses detected from Vietnam fall into genotype 2B according to WHO nomenclature recommendation. Genotype 2B viruses were previously known to circulate in China, India, and South Korea. These data indicate that viruses of genotype 2B were circulating in

Vietnam and perhaps throughout the Asian continent.

Japan is always one of the most fascinating countries. Other than its excellent nature, appealing culture, colorful and comfortable lifestyle in the city that impressed me, I had a chance to learn more and got memorable experiences. With each experience in Japan, I am sure that I got a better understanding of who I am, where I am, and Japanese people.



牛島研究室での TRAN 先生



東京・渋谷駅近くのタイレストランにて
(TRAN 先生は2列目左端)

絆で紡ぐ未来

牛島 恭子

株式会社三祐 (NPO 国際健康開発正会員)

「さくらさくらさくらさくら万の死者」
一日経俳壇に掲載された句は、岩手県在住の方による東日本大震災を詠んだ作品でした。その短い言葉の中に、被災者の深い悲しみと苦しみが感じられ、涙が止まりませんでした。

2011 年 3 月 11 日に起きた大地震、大津波、そして原発事故によって、広域的な複合災害となり、多くの死傷者を出しました。また、数万人にも及ぶ人々が、家族や友人、そして家を失うこととなりました。国内のみならず世界中から義援金とお見舞いの言葉が届けられ、テレビからは「頑張ろう、日本」や「心をひとつに」、「あなたと共にいる」という復興に向けてのメッセージが繰り返し流れています。間もなく二カ月が経とうとしていますが、多くの人達が少しでも力になりたいと募金や節電をしている日々が続いています。

ゴールデンウィークの一日、先日の主催チャリティで得た収益金を持って、炊き出しを続けているというレストラン「アル・フィオーレ」のシェフである目黒浩敬氏にお会いするために仙台に向かいました。耳にした避難所の様子から、全国から集められた支援物資や義援金という善意が殆ど届いていない現実を知り、悲しくも腹立たしい気持ちになりました。また、目黒シェフのお話の中で最も印象に残ったのは、「一番怖いのは忘れ去られること」という言葉でした。震災の報道が減り、被災地以外に住む人々が関心を失って、被災者が取り残さ

れることだと。

その後、仙台市在住の友人の案内で仙台市周辺を一回りしました。市内は驚くほど復旧が進んでいましたが、壊れたままの外壁や断層を埋め立てた道路等々、至るところに大地震の爪痕が残っていました。一方で、海岸近くには言葉を失う光景が広がっていました。破壊された家や車、置き去りにされた船、根元が剥き出しになって倒れている木、堆く積まれた瓦礫…。石巻や陸前高田などの被害状況はこの何百倍も酷いのだと、「帰る前に見て行って欲しい」と案内してくれた友人は言っていました。

もっと驚いたのは、その津波の跡を笑いながらデジカメで撮影する観光客の様子でした。

彼等は壊れていない家があり、布団で眠り、温かい食事がとれる、被災地以外に住む人間です。そのような心無い行動をする「他者」をじっと見つめる瞳に、言葉がありませんでした。

被災者とその他の人々は本当に「絆」を感じているのでしょうか。

私達の手は無力で、被災された人々を元の生活に戻してあげることは出来ません。極限状態を経験した彼等の悲しみと苦しみを理解することも出来ません。私のような一般の人間が出来ることはと云えば、支援を行うことだけです。復興に向けて、長期的な支援が必要なのは確かです。然しながら、それは金銭的な問題のみならず、人々の思いもまた大切であると思います。一人ひとりが被災者の悲しみと苦しみを受け止めて、寄り添って生きていくという心の絆

が、この国により良い未来をもたらすのだと信じています。

留学生としての日本での生活

Lucky Runtuwene

大分大学大学院医学系研究科博士課程

2010年4月にインドネシアから日本へ研究留学生として来ました。大分大学で専門の研究ができること、日本文化を直接体験できること、また、いろいろな国の留学生に会えることは、とても有意義なことです。

日本に来る前は、インドネシアの北スラウェシ州のシアウ島で私は医師として働いていました(写真1、2)。島へは州都マナドから船に乗って、6～8時間かかります。そして船は2日に1回だけでした。その島で働いていた時に、大変に難しい病気の救急患者さんと会いました。その時はいつも患者さんのための最高のヘルスケアを考えていました。



写真1 マナドから船で6-8時間のシアウ島

シアウ島の人口は多くはありませんでしたが、島の病気の中で感染症は大きな比率でした。私は大学の医学部生であった時か

ら感染症、人間と病原体の“せめぎあい”に興味がありましたので、その専門をもっと勉強したいと思っていました。特に分子生物学的技術を使って感染症を研究することでした。ですから、文部科学省の留学生試験に受かって、大分大学で勉強できることを、とても嬉しく思っています。



写真2 インドネシアで働いていた保健所

大分大学医学部ではデング熱・マラリア・フィラリア症など、蚊が媒介する節足動物媒介病の研究が行われています。江下先生の指導で、病原体に感染した蚊が発現する遺伝子を調べて、媒介蚊のコントロールに役立つヒントを探したいと思っています(写真3)。

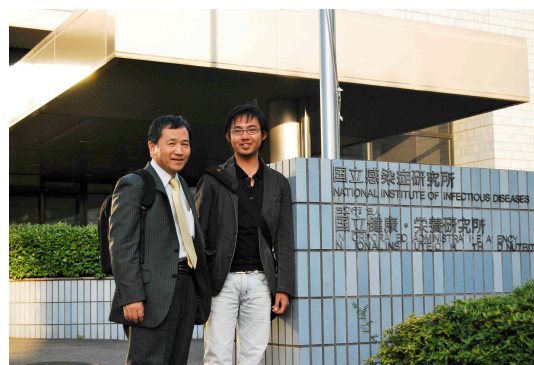


写真3 学会発表で上京したときの記念写真(左は江下先生、右はルッキー)

私は既に1年間日本に住んでいます。その間、色々な経験をしています。大学のクラブ活動にも入っています。ワンダーフォーゲル部では、脚腰が鍛えられます。今年は和弓に挑戦します。これらの経験は私の将来にきっと役に立つと思います。更に、これから行う予定の研究が人々の健康に、そして専門分野においても、役に立つと良いと考えています。

あとがき

東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。未曾有の大災害に対して復旧・復興が速やかに行われますことを望んでいます。年月はかかるかもしれませんが、皆で力を合わせることによって、この難局を乗り切れると信じています。

特定非営利活動法人(NPO) 国際健康開発会報の6号を発行することが出来ました。前号を発行したので3ヶ月ほど前ですので、少しあわただしかったです、なんとか発行にこぎ着けました。原稿を投稿して下さいました、皆様にお礼申し上げます。本会報は、ホームページ

(<http://square.umin.ac.jp/boshiken/>)
上でも閲覧出来ますので、各方面の皆様に読んでいただければと期待しております。
(江下優樹記)